キリストに従う覚悟

ルカによる福音書14章25～33節
2024年2月18日
松田 基子 師

皆様はどんな理由で教会に来られる様になられましたでしょうか。 友達に誘われて、伴侶に勧められて、クリスチャンホームに生まれたから、ミッションスクールでキリストに触れたから、キリスト教文学を通して興味を持ったからなど、様々な理由で教会に来られるようになられたのだと思います。

その教会で、生ける**キリスト**に**出会い**、このお方こそ、私の人生を、存在の全てに**責任を負って下さる**方だと分かった時、

『私は、**このお方を一生、信じ抜いて**行こう』

と**決心**されたのではないでしょうか。 しかし、今この時、私達はイエス・キリストを信じる信仰にどの位の真剣さを持って、イエス・キリストに従う、つまりイエス・キリストの弟子としての生き方をしているでしょうか。 今日私達がイエス・キリストを信じる信仰を告白し、教会に集う事について非難されたり、攻撃されたりする事はありません。 憲法で信教の自由は保障されており、社会的にも評価されていて、何か特別に困難を覚えることはありません。

しかし、それだけに、私達はキリスト者として、自分がイエス・キリストの弟子であると言う自覚は薄いのではないでしょうか。 そんな私達に、今朝の聖書箇所から、イエス様は厳しい言葉で迫っておられます。 ルカ福音書14章25節以下を見ますと、

「大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。 もし、誰かが私のもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、さらに自分の命であろうとも、これを憎まないなら、私の弟子ではあり得ない。 自分の十字架を背負って付いてくる者でなければ、 誰であれわたしの弟子ではあり得ない」

とのお言葉です。 何と厳しい言葉でしょう。 この時イエス様は、ガリラヤのカファルナウムを拠点として、神様の御心を説き明かし、病人を癒し、数々の奇跡を行われて、3年が経っていました。民衆はイエス様に待望のメシアであることを期待しました。

イエス様に対して、熱烈な思いで、

『イエス様の弟子になりたい』

と願う人々がいました。 イエス様はそう言う人に対して、ルカ福音書9章58節で、

「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。 だが、人の子には枕する所もない」

と言って、篤い心に水をかけられました。 イエス様の周りには、イエス様の弟子になりたいと願う人が沢山いました。 しかし、彼らの願いは、弟子になる事によって、**地上の栄達を願うもの**でした。

誰一人として、

『真のメシア、救い主は、人類を永遠の罪の滅びから救うために、人類の罪を一身に引き受けて、その身に依って人類を贖い出し、救うお方である。 それがイエス様である』

と言う事は分かりませんでした。 イエス様はこの時、13章22節に記されていますように、十字架に架かる覚悟をもって、エルサレムに向かって進んでおられました。 そこでイエス様は、自分の考え、熱意から、ご自身の弟子になる事を求めている人々に対して、ご自身の弟子である故に受ける苦しみ、負うべき犠牲、困難を示されなければなりませんでした。 その為に、このように厳しい言葉を言われたのです。

「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、私の弟子ではあり得ない」

と言っておられますが、ここで、**憎む**と訳されている言葉の真意は、

『避ける、離れる、従属的位置に置く』

と言う意味です。 私達は自分の肉親を、掛け替えの無い存在だと思って居ます。 それだけに肉親がキリストに付いて行くなら、苦労し、苦しみの人生を歩むことになると分かれば、肉親の情で、同意は出来ません。 反対をしてしまうのです。また、決意をした者も肉親の情には弱く、負け易いのです。 ですから、イエス様に従おうと決断したなら、生来の肉親の情と先ず決別しなければなりません。 しかし、良く考えて見ますと、**自分の命**も、自分の物の様に思っていますが、これも**神様からの預かり物**です。 **愛する肉親の一人ひとり**も、**神様からの預かりもの**です。

私達は何一つ、自分の命さえ、自分の物ではありません。 その事が分かるなら、イエス様に従う為には、自分の命も、愛する肉親も、一度神様にお返しする事です。 そして、神様からの預かり物としての関係を確立するのです。 ですからそれは、肉親への責任を放棄すると言う事ではありません。 神様を中心にするとき、どちらも正しい関係に生きる事が出来るのです。 この世的な肉親の情と決別して始めて、十字架に 架かられたイエス様の愛に答え、十字架の価値を見出して、イエス様に従い通して行けるのです。

そこで、イエス様は27節で、

「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれでも、私の弟子ではあり得ない」

と言われました。 当時十字架刑は、ローマ帝国が帝国に刃向かう危険分子と極悪な犯罪者に科した極刑です。 これ以上の苦しみは、考えられないと言うものです。 イエス様はその十字架を負われるのですから、弟子になると言う事は、当然同類に扱われて、苦しみを負う道を歩まなければなりません。 イエス様はご自身の御心とは違った思いで、つまり、

『自分に利する事を求めて、弟子に成りたい』と願っている人々に、

『私の弟子になると言うことは、あなた方が考えている事とは違うのだよ。 だから良く考えなさい。 そうでなければ、付いて来たけれども、途中でこんな筈ではなかったと後悔することになる』

と言っておられるのです。

そこで、イエス様は、28節から、譬えをもって問いかけられました。

「あなた方の内、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰を据えて計算しない者がいるだろうか」

と問い掛けられました。 ここで言われている塔と言うのは、ぶどう園に盗難や動物の被害を見張るために建てる塔の事が推測されています。どの程度の物なら手持ちの資金で建てられのか、計算を繰り返して、

『これなら建てられる』

と言う物を決めて建て始めるのが賢明な農夫のする事です。

『それを無視して建てたいと思う物を建て始めたけれども、資金が足りなくなり、工事が途中でストップしてしまった』

となったなら、用を成さないばかりか大きな損失です。 そして、周囲のもの笑いになってしまいます。

もう一つの譬えは、王と王との戦いです。

「2万の兵を率いて進軍してくる敵に対して、自分には一万の兵しか居らず、敗北は目に見えている時、賢い王であるなら、敵がまだ遠方にいる間に急使を送って、和を求めるに違いありません。」

イエス様は、自分の考え、熱意から

『イエス様の弟子になりたい』

と願っている人々に対して、

『私に従って来る事は、あなた方の計算に合わないことになるのだよ。 その為に途中で投げ出してしまう事になるのだよ。だから、この世の賢い王の様に、あなた方は痛手を負うことになると分かっているのだから、私の弟子に成ろうとする事は、良くよく考えなさい』

と言っておられるのです。

イエス様が言わんとされている事は、

『イエス様の弟子に成ると言う事は、この世の計算、損得の世界ではない』

と言う事です。 自分の全存在を賭ける事なのです。 そこでイエス様が示された結論が33節です。 岩波訳では、

「従って、この様にあなた達の内で自らの財産の全てを断念しない者は、誰一人私の弟子に成ることは出来ない」

と言われました。

自らの財産とは、自分の命、肉親など拠り所としている全てであり、それを断念する、つまりそれを拠り所とはしないで、イエス様だけを拠り所とすることです。 何故イエス様はこれ程厳しい事を言われたのでしょうか。 神の御子であるイエス様だけが、神様のご性質、神様の御心をご存知でした。 完全な愛を持ち、全き聖にして、全き義、正しさを持って居られる創造主であられる神様にとって、罪を罪とも思わず、罪の結果である、永遠

の滅びの絶望も分からず、滅びに向かう人類を、命の与え主の愛を以て救うためには、神様に執って掛け替えのない御子を、人の世に遣わし、その身に人類の罪を負わせ、身代わりとならせて、罪を償わせなければならなかったのです。 その方法によってだけ、罪に汚れた人間を救い出し永遠の命をお与えになることが出来たのです。

神様の愛と義が全うされる為に、父なる神様も、子なる神様も、それ程の犠牲、痛みを負われたのです。 ですから、永遠の命の価値は、自分の全て、命にも増して、永遠に最も価値あるものなのです。 **その価値が分かる者だけしか最後までイエス様の弟子として付いて行くことはできない**し、付いて行き得ません。 イエス様は十字架を覚悟してエルサレムに向かわれるこの時、この事をはっきりと宣言しておられるのです。 では、誰がこの厳しい招きに答える事が出来たのでしょうか。

私はここで、この日本にも、この地上の富に優る永遠の命の尊さを知って一途に、イエス・キリストに従って行ったキリスト者の事を思います。
キリシタン弾圧に遭い、殉教していったキリシタン達がいました。 彼らは永遠の命の確信と、その絶大な価値を知って、イエス・キリストの弟子である事を告白し続けました。 彼らは全てを、自分の命も断念して、キリストに従いました。 その犠牲によって日本のキリスト教は、今日を得ているのです。 感謝の他ありません。

キリシタン大名の高山右近は、
1552年に、高山飛騨の守の長男に生まれ、
父のキリシタン入信によって全家族が洗礼を受けました。 右近は21歳から33歳まで高槻の領主となって領内の二十数カ所に会堂を建てて福音が伝わる様にしました。 そして、家臣や領民に対して、

「万事を越えてデウス(ラテン語で、唯一の神様)をお大切に思い奉ることと、我が身を思う如く、隣人を大切にしなさい」

と教えました。 イエス様が最も重要な戒めとして教えられた戒めです。右近自ら率先して神様に従う生活を求め、また、示しました。

彼は貧しいキリシタンの葬儀に出かけ、当時最も低い身分に置かれた人々の仕事とされていた死者の棺桶を担いで、領民に感動を与えたと言われています。 また、宣教師の働きを助け、会堂建設や神学校の設立に尽力しました。 右近はまた、茶人として茶道を通して大名への伝道にも熱心でした。 蒲生氏郷、小西行長らを洗礼に導きました。 右近は武将としても功績を挙げて1585年33歳の時、関白豊臣秀吉から明石6万石が与えられました。 しかし、2年後 1587年に秀吉は宣教師達の教えが、神社仏閣に与える影響を危惧しました。そこでキリシタンは日本の宗教である神道、儒教、仏教を惑わし、政治体制を脅かす邪教だという烙印を押してバテレン追放令を出し、宣教師達に国外退去命令を出すと共に、キリシタン大名達に棄教を迫りました。

彼らの中には、表向き秀吉に従うふりをする人また、棄教をした大名もいました。 右近に導かれた黒田長政は棄教しました。 右近も秀吉を執るかキリストを執るか選ばなければならない時がやってきました。 もし、秀吉の命令に従うなら、将来大大名に取り立てられて、名を挙げ、高山一族、家臣も出世する事でしょう。 反対に今ここで、キリストに従うなら一切を失ってしまうのです。大名の地位も、財産も、そして自分一人でなく、高山一族と家臣を路頭に迷わせてしまう事になってしまいます。 右近は思い悩み、祈り抜いて答えました。

「デウスに従って参ります。 領地、領民は全てお返しいたします。」

右近は神様に背く事は出来ませんでした。
彼は全てを捨てて、自分に与えられた十字架を負う決心をしました。 同信の小西行長によって、小豆島や、肥後熊本で匿われました。 一方秀吉は、高山右近を惜しみました。 その為に3年後の1588年に謹慎処分として、加賀藩預かりにしました。 右近は前田家の相談役となり、功をなしますが、時代は豊臣から徳川の世に変わると、徳川幕府は、封建国家体制を確立する為には、キリシタンは障害になると考え、一層厳しく1614年に全国にキリシタン禁令を発布しました。

右近一族は、国外追放を命じられました。
2月15日、右近は信仰故に戻されて来た娘、長男が残した5人の孫達、同じく前田家預かりにされていたキリシタン武将の内藤如安一家9名と数

名の家臣、使用人と共に、警護兵に伴われて金沢を出発しました。 時は真冬の極寒の中、大雪で、騎馬でなければ通る事の出来ないような、困難な山道や坂を64歳の高山右近が先頭に立って歩いたのでした。

孫達も大変雄々しく、困難な道中に弱音も吐かずに、右近に続きました。 近畿からは船で長崎へと向かいました。 長崎に着いたのは、4月半ばだったとされています。 当時武士にとって国外追放は、処刑されるよりも不名誉な事であったそうです。 11月7日宣教師達と、キリシタン達は粗末で小さな船に寿司詰めにされて二隻はマニラに、三隻はマカオに向けて出帆しました。

右近の一行は、出帆から約1ヶ月、苦難に満ちた、命の危険に晒された航海を強いられました。粗末な少しの食糧、荒波の中での船酔い、そして、風雨に曝されて、多くの人は病気になり、高齢の神父は召されて行きました。 危険な航海も神様に守られ、破船することなく、マニラに到着しました。 すると、右近達の事は既に宣教師達によって伝えられていましたので、市を挙げて歓迎され、祝砲で迎えられました。 それは天国に迎えられる時を思わせるものでした。

国王からは、俸禄を与えるとの好意が示されましたけれども、右近は、

「**キリストのために一切を投げ捨ててから、**
再び安易な生活に戻るつもりはありません」 と言って辞退したのでした。 やっとの思いで辿り着いたマニラでしたが、右近は病に伏し、到着後40日にして、永遠の御国へと召されて行きました。マニラの歓迎に優る天の歓迎を受け、イエス様は、ご自身の為に負ってきた右近の十字架を、天の栄光で輝かせ、地上の労苦に豊かにお報いになったのでした。

ところでイエス様は、今日もこの厳しい言葉をもって、私達を招いておられます。 そう言われますと、

「私にはとてもそんな立派な生き方は
出来ません」

と尻込みをしてしまいます。 それはイエス様の方が良くご存知です。 イエス様はここで、

「自分の十字架を負って」

と言っておられます。 自分の十字架、それは私達の全てを知っておられる神様がお与えになる試練です。

コリント第Ｉの手紙、10章13節には、

「**あなた方を襲った試練で、人間として**
耐えられないようなものは無かった筈です。
神は真実な方です。 あなた方を耐えられ
ないような試練に合わせる事はなさらず、
試練と共に、それに耐えられるよう、
逃れる道をも備えて下さいます」

とあります。

思い返しますと、イエス様に十字架を負わせようとする裁判の夜、イエス様を

「**知らない**」

と否んだペトロでしたが、イエス様が復活されてイエス様の十字架が、自分の為であった事が分かった時、ペトロの心は変えられ、聖霊に助けられて、迫害の中を、キリストと共にキリストの弟子としての生涯を立派に全うしました。
大切な事は、イエス様の十字架の愛が、迫って来て、その愛に答えて、唯一途にイエス様に付いて行きたいと願うことであり、どんな十字架かを心配するのではなく、どんな時もイエス様の**愛と神様の最善**を信じて従って行くだけです。イエス様は必ず共にいて、私たちの十字架を共に負って下さいます。

イエス様はマタイ福音書11章30節で、

「**私の軛は負いやすく、私の荷は軽い**」

と言われました。 私達が負うべき自分の十字架も、イエス様が共に負って下さるのです。
ですから、必ず負い通す事が出来ます。 この地上の一時の安逸の為に、イエス様の愛を裏切る事なく、イエス様に従い続けましょう。

「**イエス様の十字架の愛を、もっと深く**
悟る者として下さい」

と日々に祈り求め、その**愛に答えて、イエス様に従っていく覚悟をしましょう**。 神様は私達の覚悟が危ういものであるにも拘わらず、喜んで下さり、聖霊の助けと導きを与えて、その覚悟を全うさせ、天の御国に迎えて下さるのです。
ただイエス様に全信頼して従って参りましょう。

　お祈りを致します
憐れみ深い天の父なる神様

　罪と汚れのみ多く、自分の行く末もわからず、
自己中心で、滅びに向かっていた私達を
教会へ導き、生けるキリストに出会わせて下さり、
永遠の命に至る御救いをお与えくださり、心から
感謝申し上げます。

　絶大な恵みを頂き乍ら十字架を負うことを恐れる者をお許し下さい。 しかし、唯一途にイエス・キリストに従って行く覚悟です。 御国に至るまで与えられた十字架を、聖霊に助けられイエス様と共に負い通す者にして下さい。

　尊い救い主、イエス・キリストのお名前によって
お祈りを致します。
アーメン。